

言語接触と言語変容

—— 古英語・古ノルド語間の接触について ——

松 瀬 憲 司

1.はじめに

英語史のみならず、大方の個別言語史というものを、その当該言語と複数の他言語との接触を抜きにして語ることは、まずできない。たとえ、その言語の基礎土台部分には、19世紀に花開いた比較言語学によって明らかにされた言語の「系統性」があるとしてもである。¹ことに現代英語の場合、言語系統的には印欧語族のゲルマン語派(西ゲルマン語低地ドイツ語系)に属しているものの、その歴史において度重なる他言語(同族言語も含む)との未曾有の強烈な接触を経験した結果、比較的近親語であるはずの現代標準ドイツ語(高地ドイツ語系)とは、かなりかけ離れたものとなっている。²さらに言えば、言語系統的には英語にもっとも近いとされる言語、オランダ北部のフリースラント諸島などで今もなお話されている「フリジア語」(低地ドイツ語系)でさえ、「全く別もの」という印象を受ける。

この、英語と他言語との接触には、英語史上いくつかのパタンがあったのだが、本稿では特に、英語の草創期である古英語(以下OEと略記する)時代[およそ西暦450年から1100年頃]における、OEとアーン人・ノルウェー人ヴァイキングの言語「古ノルド語(Old Norse: ONと略記)」との接触について考えていくことにする。このONは、やはり印欧語族ゲルマン語派に属しているが、西ゲルマン語のOEとは違って、「北ゲルマン諸言語」の祖先言語である。³したがって、この場合、同族異種言語接触ということになる。

本稿の構成は次の通り。まず、次節で、Toyne(1948/96)、Earle & Plummer(1952)、青山・今井(1982)、富沢(1988)、ヒバート(1998)、川北(1998)らを参考にイングランド史を振り返りながら、当時ONを話していた

デーン人たちとアングロサクソン人との接触を整理した上で、それに続く節で、比較的新しい英語史研究に属する Baugh & Cable(1993⁴)、Fisiak(1993)、児馬(1996)、Leith(1997²)、ノールズ(1999)[=Knowles(1997)]らを取り上げ、これら二言語間の「接触」にかかわる問題点を議論する。そして、最後の節で全体をまとめる。

2. デーン人ヴァイキングのイングランド侵攻概観

『アングロサクソン年代記』(以下『年代記』と略す)の記述によれば、北方からのヴァイキングのイングランド侵攻は787年に始まるとされる。“...comon ærest .iii. scipu Norðmanna of Hereðalande. ...Ðæt wæron þa erestan scipu Deniscra manna þe Angel cynnes land ge sohton. (=...came first three ships of Northmen from Hörðaland. ...Those were the first ships of Danish men that attacked the English people’s land.)” [Laud MS.] といった文章の中で、「ヴァイキング」を指す語として *Norðmanna* と *Deniscra manna* を指摘できる。⁴

だが、その後、イングランド史上、否、西欧史上ヴァイキングの名が「恐怖」の代名詞となる事件が793年に起こる。リンディスファーン修道院(ノーサンブリア)の襲撃である。⁵『年代記』には、“herðena manna hergung (=plunder of heathen men)” [Laud MS.] と記されており、ヴァイキングは「異教徒」として言及されている。

さらに、その後も、次々とイングランド東海岸の修道院が彼らの襲撃を受けることになり、文字通りイングランド(および大陸)における「ヴァイキング時代」が幕を開ける。

このような比較的小集団による略奪・本国への帰還を主とする、デーン人ヴァイキングの襲来をその第一期と呼ぶとすれば、その第二期は、大軍団による略奪と「定住」によって特徴付けられる。本稿で取り上げる、OEとONとの本格的な接触は、まさにこの時期を発端としている。

まず、彼らは、851年に350隻もの大艦隊でテムズ川から侵入し、カンタベリ・ロンドンに陥落させ、サレーにまで進駐した。865年、ケント東部地域を侵略。また、866年には、イーストアングリアで越冬し、翌867年に、ヨー

クを陥落させる。871年には、イーストアングリア王エドモンドを殺害、その勢いはとどまるところを知らなかった。

次いで、この異教徒たちは一気呵成に南部のウェセックス王国に侵入したが、ここで思わぬ抵抗に遭う。ウェセックス軍は進撃と後退を繰り返しながらも必死に持ちこたえるのである。その指揮官こそ、かの誉れ高きアルフレッド大王(在位871-899)であった。そしてついに、878年、ウェセックス軍はデーン軍を打ち破り、デーン人たちはアルフレッドの王国から撤退することになった。このとき、ウェドモアにおいて、両者の間で条約が締結された。そこには、デーン人のキリスト教への改宗と「デーンロー(Danelaw)地域」定住の承認が盛り込まれていた。

さて、この後、アングロサクソン人とデーン人の抗争は、いよいよ第三期に突入する。それは、「政治的適応と同化」の時期(Baugh & Cable)である。ウェドモア条約により、実質上、イングランドは地理的に二分された。東北のデーン人王国と南西のウェセックス王国である。両者は、しばらくの間、条約にもかかわらず、絶えず小規模な軍事衝突を続けていたが(ただ、『年代記』では、一時期、大陸でのデーン人の動静に関する記述が大半を占めるようになり、両者の戦闘の記述は、なりをひそめる)、894年以降両者の対立は、にわかには激しさを増していく。『年代記』に、しばしば、“bræcon pone frip (=broke the peace)” [Parker MS.]という表現が見られるようになるのもこの頃である。そして、その頂点とも言える戦闘が、937年の「ブルーナンプルフの戦い」であり、そこで、アルフレッド大王の孫アゼルスタン王(在位924-940)麾下のウェセックス軍はデーン人とスコット人の連合軍を打ち破ったのだ。これ以後、デーン領であったイングランド東部は奪還され、ウェセックス王国が事実上イングランドを統一した。『年代記』973年では、パースで戴冠したエドガー王を“Engla waldend (=ruler of the English)” [Parker MS.]と呼んでいる。

ところが、アングロサクソン人によるイングランド統一も束の間、991年、今度は、後にノルウェー王となるオーラフ・トリュグヴァッソンが大艦隊を率いてテムズ川に侵入、太守プリフトノス麾下のエセックス軍と交戦し、これを殲滅した。いわゆる「モールドンの戦い」である。さらに、994年には、

オーラフとデンマーク王スヴェインの連合軍がロンドンを襲った。このスヴェインは、その後も襲撃を繰り返し、アングロサクソン人から「デーンゲルト」と呼ばれる賠償金を山ほどせしめたのだった。そしてあろうことか、1017年には、そのスヴェインの息子のクヌートが、⁶ イングランド全土に君臨する。『年代記』には、“feng Cnut cyning to eall Angel cynnes rice (=King Cnut ascended the throne of all English people)” [Laud MS.]とあり、クヌートを創始者とする北海帝国の一部として、イングランドのデーン王朝は1042年まで続くことになるのである。

3. 古英語と古ノルド語の接触

3.1. デーン人の定住にまつわる問題

前節のような状況下でOEとONは接触を果たすわけだが、まず第一に注意したいことは、なるほど、アングロサクソン人にとってデーン人は侵略者であり、アングロサクソン「軍」とデーン「軍」が後者のデーンロー地域割譲後も衝突を繰り返し、反目しあっていたことは事実としても、デーンロー地域に定住したデーン人の農民とその地域に元々居住していたアングロサクソン人の農民たちとの接触は、両民族の軍事・政治的対立をよそに穏やかなものであったことである。我々は両軍の激しい戦闘にばかり目を奪われるあまり、ともすれば、デーンロー地域でのアングロサクソン人殲滅後、デーン人が入植したかのような錯覚に捕らわれがちだが、実はそうではない。戦闘と入植・定住は別次元で捉えられなければならない。

一般に、デーン人たちは、デーンロー地域に数多く見られるスカンジナビア系の地名、例えば、Grimsby・Althorp・Langthwaite・Nortoftなど (Baugh & Cable, 1993⁴:96)に見られるような形で大規模に入植しているが、⁷ Fisiak (1994:25)が、“Scandinavian invaders setteled in England not in totally isolated areas but either in places already inhabited by the English (and remnants of the Celts in the north-west) or in their neighbourhood”と指摘するように、また、Leith (1997²:22)でも、“on many occasions the Scandinavians did not displace the Anglo-Saxons from their own settlements, but grouped themselves near them, often in less fertile places”と

されているように、両者のデーンロー地域での共存共栄は強調されるべきであろう。さらに、Baugh & Cable (1993⁴:93)も、“an extensive peaceable settlement by farmers who intermarried with the English, adopted many of thier customs, and entered into the everyday life of the community”と述べ、デーンロー地域では、ON・OEともに、ある意味「自然な」かたちで接触できた状況があったことを指摘している。

また、一方で、デーンロー在住のアングロサクソン系住民側に視点を転ずると、ノールズ(1999:42)が指摘するように、エアドレッド王(在位946-955)率いるウェセックス軍がデーン人の王エリク・ブラッドアクスからヨークを解放したとき、「ヨークの人々にとっては、3代にわたるデーン人との接触の後、エアドレッド王は少なくともエリク王と同じくらい外国人と思われていたのかもしれない」のである。いわゆるデーンロー地域での民族混合がスムーズに進むことによって、彼らの中でアングロサクソン系という意識は既に希薄になっていただろう。これには、デーンロー地域のイングランド人は、ウェセックスと同列に論じられるアングロサクソン人であっても、元をただせば、イーストアングリア・マーシア・ノーサンブリアといった王国を形作った「非サクソン」系であった事実も多少作用したと思われる。まことに、「血液の同化というものはそれほどに容易で、それほどにすばやい」(司馬, 1969/76:14)と言わざるをえない。

もう一つデーン人の定住に関して重要なことは、彼らのイングランドの生活習慣に対する「適応力」であろう。Baugh & Cable (1993⁴: 93)は、これを、ヴァイキングとしての生活から来る“natural adaptability of the Scandinavian”と呼び、彼らを“a cosmopolitan people”としている(Toyne, 1948/96:34も参照)。デーンロー地域がデーン人の支配地域であるとするれば、そこに組み入れられたアングロサクソン人は当然「被支配民」ということになるのであろうが、そこでは、そのいわゆる「支配・被支配という構図」があまりはつきりしていなかったと言っていい。むしろ侵入者のデーン人の方が、積極的にアングロサクソン人の地域社会に溶け込んでいったように思える。まさにこれこそ、長年培ってきた彼らの環境順応力のなせる技だったのだろう。

3.2.政治的支配と言語強制の問題

ところで、Leith (1997²:22)には、“although a third of England was occupied by speakers of Danish and Norse, the newcomers did not, and could not, impose an alien set of customs and instructions; nor could they impose thier language even if, for a time, it may have been socially dominant (下線部は筆者)”とあり、このデーノロー地域では、支配民族と被支配民族間にありがちな、「あの状況」が見られなかった点が指摘されている。すなわち、土着のケルト人(ブリトン人)が新興支配勢力であるローマ人に対して、また、特にアングロサクソン人に対して、侵略者の言語を(強制的に)使用させられるといった状況を、このデーノ人たちはアングロサクソン人たちに対して、ついで創出しえなかったのである。もちろんこのことには、Leith自身が述べるように、ウェセックス王国による反撃とイングランド再統一の迅速さが大いに関係するところだろうし、また、デーノ人側からONの政治的「強制」はなかったとしても、前述のような定住状況を考えれば、そこに住民レベルでの「共生」はあったわけだから、両者の言語が馴染み合う土壌が確保されていたことは間違いなく、ONの要素がOEに流れ込むことも自然の成り行きであったはずだ。

ただ、視点を変えて言うと、デーノ人はむしろ、ONをアングロサクソン人に押しつける必要性自体を感じてなかったのかもしれない。どうも世界各地に散らばっていったヴァイキングたちは、新しい故国を建国することこそが最大の関心事であり、その母語を無傷のうちに保存しようとまでは思わなかったふしがある。ノルマンディー公国しかり、シチリア王国しかりである。そこで使われる言語の(もちろんONも最終的には一部遺伝子的に取り込まれることになるのだろうが)あくまでもベースとなっている部分は現地の土着言語なのである。だから、たとえウェセックス王国の反撃が全くなされず、そのままデーノ人による「デーノロー王国」のようなものが存続していたとしても、おそらくデーノ人は基本的には自分たちの言語を放棄し、共存するアングロサクソン人から当地のOEの一変種を吸収し、「イギリス人」になっていったのではないかとさえ思われるのである。それは、おそらく、ノルマン人のノルマン・フランス語のような、ノルド語の遺伝子を持った「英語」と

でもいうべき言語であったろう。⁸

立場を変えてさらに言えば、ウェセックス王国が反撃し、デーンローを奪回したときでさえ、アングロサクソン人はデーンロー地域のデーン人に対して殊更なOEの強制をしなかったようだ。⁹ Baugh & Cable(1993⁴:93)によれば、新政権の政策は“to accept as an established fact the mixed population of the district and to devise a *modus vivendi* for its component elements” というものだった。まさに現状(living mode)の追認をやったのけたのである。

つまり、ウェセックスによるイングランドの最終的政治統一は、無論「民族」としての統一では決してなく、むしろかつて存在した小国分立による西ゲルマン系民族間の覇権争いが、北ゲルマン系デーン人の流入によって形を変えて存在した上に成り立つものであった。このような統一をしたからこそ、現代まで続く「南部対北部」の構造ができあがり、南部人がヨークの英語を侮蔑するといったことが起き始めたのであろう(ノールズ, 1999:53)。そこでは、明確な「内なる多言語社会」(安田, 1999:31)が形成されていると言える。

支配・被支配といった図式のもとでは、さらに次のようなことも起こりうる。これは、太平洋戦争が終結し、連合軍が日本を占領下に置いた直後のエピソードであるが、ある出版社の社長が英米会話の本の出版を思い立ち、終戦の翌月30万部ほど売り出したところ、忽ちにして売り切れ、さらに増刷を重ねたあげく、短時日のうちに360万部を完売したそうである(奥, 1995:25)。今で言うところのベストセラーである。ほんの数ヶ月前までは「敵性語」として鼻もひっかけられなかった(もちろんひっかければ、「非国民」と詰られたであろうが)言葉に関する本が、今やベストセラー書としてまかり通るといふ何とも奇妙な現象が実際に起きたのである。これには、奥氏も指摘するように、それまでの抑圧された建前の言語使用からの解放といったこともその大きな理由として挙げられようが、まさに被支配層のヴァイタリティーそのものが反映されていると言えよう。自らが生きていくためには支配者層の言語を積極的に学ぶことも必要だったに違いない。デーンロー地域では、確かにデーン人たちは、いわゆる支配者然とはしていなかったのかもしれない

が、共存して行かねばならないアングロサクソン人にとってみれば、むしろ積極的な姿勢でデーン人の言語に接したであろうことも十分想像される。そして、先ほどの戦後の日本の例で、英語と日本語という全く別系統の言語にもかかわらず、非支配層の日本人は積極的に英語を受容しようとしたことに比べれば、OEとONは同系統言語同士なのだから、アングロサクソン人はそれほどの障害もなくONに接することが可能だったことは想像に難くない。逆の立場だが、同じ頃、大陸に渡ったデーン人がONを捨て、ノルマンディー公国を建国する際に当地のフランス語を受け入れたことに比べても、はるかに対処しやすかったと思われる。

このように考えてみると、デーンロー地域では、社会的・政治的意味で、デーン人・アングロサクソン人双方からの歩み寄りがあり、その結果として、一種の「ノルディック英語」的な言語(ここでは、「アングロ・ノルド語」ではない点がクルーシャルである。あくまで主体は「英語」の方なのである)が構築されていったと推測される。これを、児馬(1996:54)やLeith(1997²:23)では、ある種の「ピジン化(pidginisation)」として捉えているが、そのような見方に筆者も与するものである。

3.3.言語の自律性と「書き言葉」対「話し言葉」の問題

上記のような民族的・政治的状況を背景として両言語の接触を考える上で、まず指摘せねばならないことは、両言語の系統的「近接性」であろう。序論でも述べたように、OEとONはどちらも印欧語族ゲルマン語派の同系列言語なのである。相違点は、OEが西方系列であるに対し、ONは北方系列である点のみ。このように、デーンロー地域は、成立時、確かにイングランド内の異民族統治による政治的独立地域としての性格を持っていたが、その使用言語は全く系列の異なる民族の言語ではなかったために、ウェセックス新政権も失地回復後彼らに対して、とりたてて言語強制という手段を講じる必要性自体がなかったと考えられる。

だが、もっと掘り下げて言えば、ノールズ(1999:44)がいみじくも指摘するように、OEとONを「はっきり定められる別々の言語として対比させることは適切ではない」のである。つまり、ウェセックス方言とアングリア方言

のOEに対する関係は、OEとONの「ゲルマン語」に対する関係に等しいのである。もちろん、ONには、前置定冠詞だけでなく、後置定冠詞といった、OEにはない特徴もあるにはあるが(Gordon & Taylor, 1957²:295-296)、全体的に捉えれば、両者は非常に似通っていたとされる。結局、両者は、まだ当時はその境界線があまり明確でなかったにもかかわらず、「国家語」(田中, 1981:21)として「後世我々によって」定義されているだけなのだ。¹⁰ 事実、デーン人が接触したのは主にアングリア方言(マーシア方言+ノーサンブリア方言)を話すアングロサクソン人だったのである。だから、彼らにしてみれば、新参のデーン人の言語の持つ違和感(ウェスト)サクソン人が話す「英語」のそれとそう大差なく感じられたかもしれない。Toyne (1948/96:27-28)も指摘していることだが、南北ユトランド半島を原故郷とするアングロサクソン人(北部がジュート人、南部がアングル人)とデーン人は「いとこ同志」なのである。¹¹ ユトランド半島という接点を持つ彼らであれば、デーンロー地域での「再合一」が苦もなく執り行われたとしても何ら不思議はない。少なくとも、我々がよく知るOEとは、実は(ウェスト)サクソン方言であることを考えると、デーンロー地域で話されたアングリア方言の実体は、むしろONとかなりの類似性を示していたのかもしれないのである。ノールズ(1999:40-41)は、イングランドでの接触の前に、大陸で既にデーン人とアングル人が接触していた可能性と、ノーサンブリア方言の不定詞形の中には、語尾の-nを欠くONの不定詞形と酷似しているものがある点、およびbe動詞複数現在形areとデンマーク語のerとの類似を指摘している。¹²

さらに、ノールズは続けて言う。OEにしろ、ONにしろ、それぞれに対して我々が持っている言語観は『ベオウルフ』のそれであり、13世紀のサーガのそれなのである。よって、「後期ウエスト・サクソン方言の書き言葉と古アイスランド語の書き言葉の比較からは、9世紀のデーンローにおける英語とデンマーク語の話し言葉の接触のはっきりした状況は与えられない」と言っている。

ここには、重要なポイントが二つある。まず、OEが指し示す実体は、自律性を持った純粋均一の言語などではなく、アングロサクソン人が使う諸方言の「総称」にすぎないのだが、実情は、前述のように、往々にしてその一

構成方言であるはずの(後期)ウェスト・サクソン方言(すなわち政治的覇者であるウェセックスの言語)のみを指すことである。そしてその第二点目は、我々はその「書き言葉」をもってOEのイメージを作り上げていることである(その最たるものが、韻文の『ベオウルフ』の言語であろう)。なるほど、ウェセックス統一政権のもとでは、文語標準形としての後期ウェスト・サクソン方言がイングランド全土で使用されたのは事実であろうが(これは、クヌートのデーン朝でも変わらなかった)、口語標準形としてのウェスト・サクソン方言が全土に流布していたわけでは決してなく、ことデーンロー地域での日常のやりとりに関して言えば、文語とはずいぶんと違った状況を呈していたはずである。Leith(1997²:98)でも、“Unfortunately, we have no evidence for the conversational usage of those times, but it would not be surprising if the grammar of written usage were more synthetic than that of the spoken”として、書き言葉の「総合性」が強調され、話し言葉とは区別される可能性を示唆している。まして、デーンロー地域のOE方言はウェスト・サクソン方言ではないのである。材料が元々異なる上に、形態も文語と口語で違うとなれば、これまで我々が抱えてきた、デーンロー地域でのOE像は修正を余儀なくされよう。同じことはON側にも言える。デーンロー地域で話されていたONの方言は、少なくともサーガに見られるような、あの「洗練された・典雅な」文語ではなかったであろう。このように考えると、どうやら、英語史におけるOEとONの接触を考える際には、根本的に両言語の捉え方を見直す必要があると言える。我々は、もっと目線の下った、「口語の日常言語」のありようを想像していかなければならないのではないか。

3.4.英語の変容

前述のように両言語の接触の「実体」は依然として判然としないが、おそらくデーンロー地域では、二言語併用を経て、屈折語尾などが簡略化・廃棄された「ノルディック英語」(Görlach, 1997:142で言うところの“a compromise language”)が発達していたに違いない。その末裔が現在の北部イングランド地方などの地方方言として生き残っているのである(例えば、語彙的に言えば、ノールズ, 1999:51で指摘されている、leik [=play], skrike

[=cry], bairn [=child]などである)。Leith (1997²:24)は、当時のイングランドの言語状況を“a continuum, ranging from a relatively unmixed Scandinavian at one end of the scale to a relatively uninfluenced English speech at the other. In between, the languages co-existed, and then merged,...”と捉え、言語連続体の存在と両言語の融合を指摘している。

いずれにせよ、デーノンロー地域という特殊な土壌を持ったために、その後形成されるイングランドの標準言語は、その血肉としてONの要素を吸収していく。そして、取り入れられたON遺伝子のおもだった形質は、むしろ中英語期以降目に付くようになる。その中でも、一般的な開放類語彙の借入に関しては、他の言語との接触の場合とほとんど同じような状況を呈するが（それでも、getやtakeがONからの借入語であると聞けば、かなり驚かざるを得ないが）、they--their--themやsheといった「閉鎖類」語彙の導入などは、全く驚嘆すべき革新と言っていい(Baugh & Cable, 1993⁴:100; 児馬, 1996:55-56; Leith, 1997²:23; ノールズ, 1999:51)。前者の中で、14世紀のチョーサーにおいては、themはもっとも遅く現れたらしく、そこでは依然として、本来語系のhemが使用されている。また、後者のsheに関しては、諸説あるようだが、Mossé (1952:57)の地図を見る限り、イーストアングリア地方のscheおよびノーサンブリア地方のscho/(3)ho/scheの分布は明らかである。¹³

4. 結びにかえて

以上見てきたことから、我々はこれまで古英語と古ノルド語の接触を多分に「形式的」に捉えてきたことが明らかになったかと思う。そして、両言語の接触を語る際には、おもに英語に入り込んだデンマーク・ノルウェー語系の語彙に注目するのみだったことも。もちろん、語彙そのものも重要である。だが、言語接触・言語変容は、言ってみれば、「生の」出来事であることを忘れてはならない。そこには、「政治」があり、「社会」そして「民族」がある。決して言葉だけが一人歩きして変化していくのではない。言葉の変化には複雑な背景があり、それを見落としてはならないのである。

また、書き言葉・話し言葉の区別は非常に重要である。話し言葉の資料が

ないだけに、初期英語のイメージはどうしても書き言葉に偏ってしまいがちである。しかし、ここで我々は想像をたくましくしなければならない。むしろ言語に関する以外の様々な資料をも利用しながら、当該言語の当時の姿を読み解いていく必要があろう。

今後は、一般方言学的な知識とアングリア方言を中心とした古方言学的知識(例えば、2000年刊行予定のFisiak & Trudgillによる*East Anglian English*など)を背景にした、支配言語であるウェストサクソン方言古英語の再分析、および言語接触のメカニズム自体を解明する手段としての「ピジン・クレオール」研究を援用した英語史研究が求められる。

このような視点に立つとき、これまで我々が学んできた英語史がいかに「形式的・皮相的」であったかをつくづく思い知らされる。歴史の中で、言語は「静的」ではなく、「動的」に、そして「立体的」に捉えられなければならないことをこの古英語と古ノルド語の接触は如実に語っているのである。以下のSmith (1996:51-52)の指摘はこのことを的確にまとめている。

“a theory of historical linguistics must take into account both speaker and system, and have the ability to provide for interactions between the two. The processes involved are dynamic and open, and this insight needs to be built into our practice of linguistic historiography.”

注

1. 言うまでもなく、その発端は、1786年、インド駐在イギリス法務官サー・ウィリアム・ジョーンズによってなされたサンスクリットとギリシア・ラテン語との比較による。
2. 1904年に、ヘンリー・ブラッドレーが*The Making of English*を著したとき、それを英語とドイツ語の単語の類似性から説き起こしているのは何とも印象的であったが、全体的に見て英語はドイツ語と近親言語とは考えられないほどの変容を遂げていると言わねばならない。
フリジア語に関しては、兎玉(1992)に詳しい。
3. おもしろいことに、Holmberg & Platzack (1995)は、北ゲルマン語の中でも古ノルド語(古スカンジナビア語)を統語的な観点から、アイスランド語やフェロー語のグループに分類し、その子孫の形である現代デンマーク・ノルウェー・スウェーデン語のグループとは区別する。
4. Earle & Plummer (1952: I, 54)によれば、Canterbury MS.と呼ばれる写本には、“*Nordmanna*”の後に“*de Danis (=from the Danes)*”というラテン語句が挿入さ

れている。

5. このヴァイキングの襲撃は、当地で687年に没した聖者カスバートによって予言されていたそうである（ファーバー1997:54）。なるほど、『年代記』にも不吉な前兆（forebecna）があったことが述べられている。

シンプソン（1982:26）は、これら787年と793年の事件を引き起こしたのは「ノルウェー人」ヴァイキングである可能性を示唆しているが（ノールズ[1999:41]も Geipel [1971]を引用してそう指摘している）、Earle & Plummer（1952: II, 59）にも、787年の記述に登場する“Hereðalands”は、ノルウェーのハルダンゲル・フィヨルドにある“Hörðaland”であるとされている。このことから判断して、アングロサクソン人が北方の異教徒を「デーン人」と呼ぶ場合には、いわゆるデンマーク人だけでなく、ノルウェー人も含めていたことが理解される。事実、10世紀に入ってから、アングロサクソン人は、アイルランドやカンバーランドに植民したノルウェー人ヴァイキングたちとも戦わねばならなかったのである。

[J. Geipel, *The Viking Legacy: the Scandinavian influence on the English and Gaelic Languages*, (Newton Abbot: David and Charles.)]

6. デンマーク語では、それぞれ、「スヴェン(Svend)」、「クヌーズ(Knud)」と発音する（橋本, 1999:26-27）。
7. ノールズ（1999:41）は、「一般にノルウェー人は多数の小さく孤立した定住地を設立した」としているが、おそらくここでも原住民であるアングロサクソン人との接触は避けられなかったであろう。

また、逆に、大量のデーン人が流入したために、アングロサクソン人の孤立地帯ができてしまったことが、地名の Ingleby “settlement of the English” からもうかがわれる（Leith, 1997 2: 22）。

8. この点、ノールズ（1999:54）は、「アングロ・ノルド語」と言い、ノルド語をベースとした言語を想定しているが、筆者は「英語」がベースであろうと考えている。彼らの adaptability からすれば、その方が似つかわしいからである。
9. もちろん、政治体制的にウエセックスが統治するのだから、特に文章語のレベルでの、「標準書き言葉」の導入は避けられなかった（ノールズ, 1999:45）。
10. 森田（1981:53-55）によると、ONの特徴をよく残しているアイスランド語では、前置定冠詞（hinn, hin, hið）の使用は書き言葉での現象であり、話し言葉では、常に後置定冠詞（inn, in, ið）であるという。だとすると、おそらくデーン人と接触したアングロサクソン人には、「語尾変化」の違い程度にしか感じられず、殊更不都合はなかったのではなかろうか（参考までに、現代デンマーク語では、後置定冠詞は-en/-etであり、単独の名詞を限定するときのみ用いられる〔岡田他, 1984:55〕）。

ちなみに、日本語でもその古層において後置定冠詞があったと安本（1998）で主張されているが（「定冠詞」を日本語でどう取り上げるかといった問題は残るにしろ）、助詞の体系が後置的なことを考えれば、これは、あなたが不思議な現象とは言えまい。

11. ジュート人に関しては、オランダのベルギーとの国境付近を原故郷とする説もあるらしいが（Graddol et al., 1996:43）、ここでの問題はむしろアングル人の方である。
12. Gordon & Taylor（1957:308）によれば、ONのbe動詞複数現在形は、それぞれの人称でerum, eruð, eruであったのだが、現代デンマーク語では、人稱・単数複数にかかわらず現在形はerが使用されるのである。
13. 多少事情は違うが、日本語でも「彼・彼女」を使うようになったのは、英語の影響だと言われている。

参考文献

- 青山吉信・今井宏. 1982. 『概説イギリス史』 有斐閣.
- Baugh, Albert C. & Thomas Cable. 1993. *A History of the English Language*. 4th edition. London: Routledge.
- Bradley, Henry. 1904. *The Making of English*. London: Macmillan.
- Earle, John & Charles Plummer. 1952. *Two of the Saxon Chronicles Parallel*. Revised edition. 2 vols. Oxford: Clarendon Press.
- ファーバー[Faber], G. 1976. 片岡哲史・戸叶勝也訳. 『ヴァイキングの足跡』 アリアドネ企画, 1997年.
- Fisiak, Jacek. 1993. *An Outline History of English*. Tokyo: Eichosha.
- Gordon, E. V. & A. R. Taylor. 1957. *An Introduction to Old Norse*. 2nd and revised edition. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Görlach, Manfred. 1997. *The Linguistic History of English*. London: Macmillan.
- Graddol, David, Dick Leith, & Joan Swann. 1996. *English: history, diversity, and change*. London: Routledge.
- 橋本淳編. 1999. 『デンマークの歴史』 創元社.
- ヒバート[Hibbert], C. 1992. 小池滋監訳. 『イギリス物語』 東洋書林, 1998年.
- Holmsberg, Anders & Christer Platsack. 1995. *The Role of Inflection in Scandinavian Syntax*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- 川北稔編. 1998. 『イギリス史』 山川出版.
- Knowles, Gerry. 1997. *A Cultural History of the English Language*. London: Arnold. (=ノールズ, ジェリー. 小野茂・小野恭子訳. 『文化史的に見た英語史』 開文社, 1999年.)
- 児玉仁士. 1992. 『フリジア語文法』 大学書林.
- 児馬修. 1996. 『ファンダメンタル英語史』 ひつじ書房.
- Leith, Dick. 1997. *A Social History of English*. 2nd edition. London: Routledge.
- 森田貞雄. 1981. 『アイスランド語文法』 大学書林.
- Mossé, Fernand. 1952. trans. James A. Walker. *A Handbook of Middle English*. Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press.
- 岡田令子他. 1984. 『現代デンマーク語入門』 大学書林.
- 奥武則. 1995. 「8月15日の日本語」『言語』, 24, 9, 20-27.
- 司馬遼太郎. 1969. 『歴史を紀行する』 文藝春秋/文春文庫, 1976年.
- シンプソン[Simpson], J. 1980. 早野勝巳訳. 『ヴァイキングの世界』 東京書籍, 1982年.
- Smith, Jeremy. 1996. *An Historical Study of English*. London: Routledge.
- 田中克彦. 1981. 『ことばと国家』 岩波書店.
- 富沢壺岸. 1988. 『イギリス中世史』 ミネルヴァ書房.
- Toyne, S. M. 1948; rpt. 1996. *The Scandinavians in History*. New York: Barnes & Noble.
- 安田敏朗. 1999. 『〈国語〉と〈方言〉のあいだ: 言語構築の政治学』 人文書院.
- 安本美典. 1998. 「上代特殊仮名遣いと後置定冠詞」『言語』, 27, 7, 81-88.

Language Contact and Language Mutation: on the Contact between Old English and Old Norse

Kenji Matsuse

Abstract

This paper claims that a “dynamic” perspective to the contact between Old English and Old Norse should be created instead of the superficial and formalistic view with which for a long time the history of the English language has been taught to us. Remember again that language is a living thing with political, social, and ethnic elements.

Even what we call “Old English” can be misleading, because there was no such a monovalent and standardized speech in the 9th- and 10th-century England. Nor had we ever in the Danelaw district such Viking’s language as used for the Saga epics. Rather there must have been more chaotic linguistic situations for the two languages. And we have to bear in mind that we only regard the English dialect in Wessex as the representative of Old English because of its strong political power at that time in England.

In order to make a full description of the history of a language, therefore, we have to face “real” pictures of those days when the language was spoken and written, not idealized and formalized ones which are often exploited as some politically concocted propaganda. And this kind of research concerning language contact and language mutation needs also to be reinforced with fresh evidence from the (ancient) dialectology and with the analyses utilizing “pidginization” or “creolization.”